

学士課程での英語語彙学習レベルについての考察

山本 五郎

1 はじめに

グローバル化が進む中、日本の英語教育に関しては、実用的な語学活動や発信力を高めるための英語教育改革が進められており、小・中・高各教育機関での学習内容の強化が図られている（文部科学省, 2017, 2018, 2020）。語学の基礎となる語彙学習に目を向けると、高校卒業までの英語の学習語彙の範囲は、3,000語から4,000～5,000語に引き上げる方針が打ち出されている（文部科学省, 2019）。ところが、高校での学習範囲を越えた部分については、学習目標や学習範囲などが十分に示されていないのが現状である。高等教育段階の大学での教育に関しては、それぞれの大学が自主的・自律的に編成すること（文部科学省, 2014）とされており、学士課程の教養科目の内容について高校までの学習指導要領で示されるような具体的な教育目標は示されていない。英語の語彙についても、高校卒業後の英語教育で習得すべき目標語数や語群は明示されてこなかった。

高校卒業後の英語教育では、ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)の普及やコロナ禍でのリモートワークなど現代社会のライフスタイルを反映した時事メディアの情報や専門書、学術論文などの様々な文献を英語で理解できる高度な能力が求められている。このため、大学の学士課程での英語教育において学習対象とすべき語群を示し、その語群の語法等について明らかにすることが重要である。このような背景を踏まえ、本研究では高校卒業後の英語語彙学習の方略の一環として、コロナショック後の時事英語に基づく語彙リストを作成し、学士課程での語彙学習の観点から特徴的な語群について焦点を当てその特性について考察した。

2 コーパスの構築と語彙リスト

現代英語の語彙分析に用いるコーパスの構築に際しては、2020年2月のコロナショック以降に出版された主だった時事雑誌をテキストデータの対象として定めたが、これは様々な分野の時事ニュースを英語で理解することの重要性を踏まえたものである。本研究では、2021年1月から2022年12月までに出版された **Bloomberg Business Week, Forbes, Harvard Business Review, Time, USA Today Magazine** の5誌について、見出しのついた6,284の記事のテキストデータを用いて時事英語コーパスを構築した。コーパスのサイズは、6,876,443語である。

新規構築したコーパスから頻度順に異なり語数 106,950語の語彙リストを作成し、その中から英和辞典（井上と赤野, 2019）で中学必修相当語彙とされるAランクから一般語彙とされるDランクまでの語を除いた語群を抽出してその特性について考察した。

3 語彙リストについての考察

研究発表では、新規に構築した時事英語コーパスを基に作成した頻度順語彙リストから、特徴的な固有名詞と一般語に注目するとともに、時事英語コーパスに含まれる連語表現の中から一部を取り上げ、語彙学習の観点からそれらの重要性について考察した。また、2020年以前の英語データを基にした大規模コーパスとの比較を行い、コロナショック以前と以後の英語において生じている語彙の差について検証した。

3-1 固有名詞

特定の企業名や人名などの固有名詞は、時事英語では頻度が高いことが確認されたため、発表では一般語と切り離してそれらについて言及した。例として、語彙リストの中で頻度の高い代表的な固有名詞20語について表1に示した。アメリカ大統領や国際的な企業名、SNSサービス、ストリーミング配信のプラットフォームなど、日本人英語学習者にとってなじみが深いものも多い。時事英語での頻度の高さを考えるとこれらをはじめとする固有名詞の重要度は高いといえる。

表 1 固有名詞の例 (順位は異なり語数 106,950 語中のもの)

順位		頻度	順位		頻度
300	Trump	2950	1307	Tiktok	631
324	Biden	2749	1337	Instagram	617
449	bitcoin	2042	1372	Microsoft	601
562	Amazon	1608	1520	Meta	531
568	Facebook	1595	2036	Bezos	366
641	Twitter	1424	2185	Elon	330
771	Google	1146	2193	Zelensky	328
929	Putin	943	2314	Tokyo	305
1025	Tesla	839	2363	Kyiv	293
1071	Netflix	801	2579	Moscow	265

3-2 一般語

本研究の語彙リストはコロナショック後の 2021 年から 2022 年のテキストデータを基に構築したコーパスから作成されているため、pandemic, COVID-19, lockdown, vaccination, vaccinate といったコロナ禍に関連する語が高頻度に用いられている。また、crypto, blockchain, cryptocurrency, e-commerce といった暗号通貨や電子取引に関する語彙の使用も顕著である。頭字語である CEO, SPAC (Special Purpose Acquisition Company) や startup, cofounder, といったビジネスに関する語彙も高い頻度で使用されていることが確認された。一般語の代表的な例として、高頻度の 20 語を以下の表 2 に示した。Inc. や corp. のような省略表記についても、辞書のランクでは E ランク扱いであるため表に加えた。

表 2 一般語の例

順位		頻度	順位		頻度
155	pandemic	5002	1026	trillion	838
250	CEO	3422	1090	corp.	783
327	Inc.	2729	1059	blockchain	813
357	COVID-19	2554	1180	cofounder	709
417	crypto	2259	1329	lockdown	619
514	app	1784	1458	vaccination	561
516	tech	1777	1512	vaccinate	535
693	startup	1297	1745	cryptocurrency	445
805	AI	1096	1880	SPAC	401
970	philanthropy	907	1964	e-commerce	382

3-3 連語表現

連語表現については時事英語コーパスを N-gram 分析し、高頻度の連語表現について着目した。3 語以下の連語表現の抽出では、一般的に使用される前置詞+名詞句の一部である of the, in the, to the などの形や a lot of や as well as などの定型表現が上位を占めていたが、4 語以上の表現では、金融機関等の企業名を伴う wealth management (富裕層向けの資産運用サービス) の頻度が高い点が特徴的であった。5 語の連語表現では Morgan Stanley Private Wealth Investment が 180 例で頻度順一位であった。B ランクの語彙である wealth に関しては、vast wealth 「巨万の富」や a sign of wealth 「富裕のしるし」等が辞書で用例として示されているが、時事英語での使用頻度を鑑みれば wealth management も用例の候補として扱う意味があるといえるだろう。以下の(a)に例示したように wealth management については、特定の企業名を伴う固有名詞としてだけでなく一般的に用いられていることも附しておく。

- (a) While financial advisors and their clients plan for a return to the office, macro challenges for the wealth management industry remain. (*Forbes*, AugSep,2021)

また、コロナ禍を反映して Centers for Disease Control and Prevention (アメリカ疾病予防管理センター) も高い頻度で用いられており、既に 3-1 でも触れたようにここでも特定の固有名詞についての知識の有用性が示唆されている。

3-4 コロナショック以前のコーパスとの比較

本研究では、今回構築した時事英語コーパスとコロナショック以前の英語データを比較するために大規模コーパスである enTenTen2020（訳 365 億語の規模で 2019 年のデータが 72.3%を占める）を用いた。コンコーダンスのキーワード検出の上位 20 語を以下の表 3 に示した。仮想通貨や電子商取引に関連する crypto, Ethereum, NFT (Non Fungible Token, 非代替性トークン), bitcoin, Coinbase のような語群や既に触れた SPAC については、一時的な使用に留まるとは考えにくく、現代時事英語における重要な語句として捉えるべきであろう。また、上位 20 位圏外ではワクチンの開発等でコロナ禍に直接的に関わる医療関係の社名や語句が特徴的な語彙として検出されていたことも付け加えておく。

表 3 コーパス比較によるキーワード

1	crypto	11	Ethereum
2	HBR (雑誌名)	12	NFT
3	cofounder	13	FTX (仮想通貨取引所)
4	self-made	14	bitcoin
5	selfmade	15	Musk
6	COVID	16	pandemic
7	Tiktok	17	Zelensky
8	SPAC	18	omicron
9	Metaverse	19	Businessweek
10	Biden	20	Coinbase

4 まとめ

本研究では、学士課程における英語の語彙学習という観点からコーパスを構築し、語彙リストを作成した。コーパスのテキストデータ元としては、コロナショック後の時事雑誌を対象としたが、学士課程の教養英語にどのような文献や情報が理解できる英語力を求めるのかという点については議論の余地があろう。いずれにしても、現代の時事英語を理解するためには、企業名などの固有名詞や経済用語をはじめとする広範囲な語彙力が求められることが示された。今後の研究として、コーパス構築のデータ取得範囲を広げコーパス規模を拡大することでより安定した語彙リストの作成とその特性の分析を進めたい。

参考文献

井上永幸・赤野一郎（編）（2019）『ウィズダム英和辞典 第4版』。三省堂。

文部科学省（2014）『大学における教育内容・方法の改善等について』

[https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/index.htm]（アクセス：2024年5月30日）

文部科学省（2017）『【外国語活動・外国語編】小学校学習指導要領（平成29年告示）解説』

文部科学省（2018）『外国語編英語編 高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』

文部科学省（2019）『教育政策における EBPM の強化 - 外国語の抜本的強化イメージ - 』

[<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/wg7/20191203/shiryu1.pdf>]（アクセス：2024年5月30日）

文部科学省(2020)『新しい学習指導要領における外国語活動・外国語の目標』

[https://www.mext.go.jp/content/20200721-mxt_kyoiku01-000008881_2.pdf]（アクセス：2024年5月30日）